

## バターのか箱

稲宮 健一

近くの生協に行くくと、バターの棚に黄色い包装の雪印と、同じ値段の生協ブランドの森永製が並んでいる。いつも、黄色い雪印を買ってしまう。思い起せば、戦後の混乱期、バターなど手に入らなかった。隣の家松尾画伯（院展同人）の兄弟は青山学院出身で、英語が達者だったので、進駐軍（占領軍）関係の仕事をしており、普通手にはいけない雪印バターを垣根越しに渡してくれた。小麦粉を焼いただけのバンケーキにこのバターを乗せ、ほおばったときのバターのとろける味は今でも忘れない。

小学校四年、今日は遠足だ。世田谷の上馬から第一師範（今の学芸大学）まで、三〇分の徒歩、東横線に乗車、段々混み始める、工業都市（今の武蔵小杉）当たり前から鮎詰め、遂に菊名あたりから、土足で座席に立たされた。要するに、ベンチ式座席の上に二人分が立って詰め込む。ようやく、桜木町をへて目的地の野毛山の配水池に着いた。貯水塔の前の芝や、丈の短い草で覆われた広い広場が少し下がって広がっていて、その向こうには横浜の港が見えた。解放された気分で、走り回りはしゃいだ。

やがて、お弁当の時間になり、持参の弁当を開いて食べ始めた。一人のお弁当に目移った。バナナが入っていた。幼稚園の頃、食べたあの味が口の中に戻ってきた。多分、海外にいけない時代、香港か、シンガポールのルートで買ってきたのだろう。ただ、うらやましかった。

戦争に負けて、海外に行くなど夢の夢だった。広い世界と繋がりたい。当時は手軽に手に入る鉱石ラジオを作り、ラジオ番組を独り占めした。やがて「初歩のラジオ」を抱えながら、秋葉原通いが始まった。実際に海外へ出張したのは、就職し、宇宙の担当になり、多くの会社の友人に見送られながら、ホノルル経由、ロサンゼルスに到達したのが初経験であった。到着前、今年火事で焼けたハリウッドあたり、プールのある家の上空を通過して、着陸した。我々との差を見せつけられた。